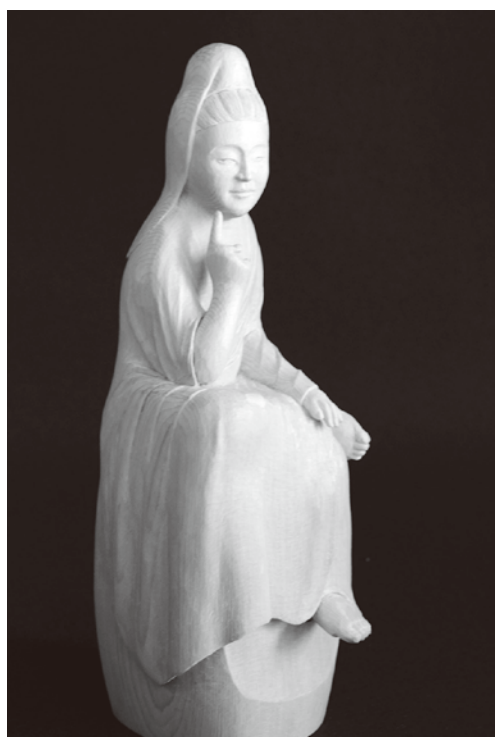


詩



「弥勒菩薩」 伴 龍一

デジタルタトゥーの扉

東京都(元井之内)

山下 佳恵

きっかけは

日常のささいなことを記録して

誰かと共感できたらいいな

誰かと知り合いになれたいいなと

はじめたインターネット

最初は見ってくれる人もなく

閲覧数も増えなかったけれど

ふとしたことから繋がる人ができて

楽しくなったネット生活

イイネ！やコメントをもらえることが嬉しくて

見知らぬ人とも仲良くなれる

もつと

もつと 繋がりたい

記事の訂正や削除

差し替えは簡単にできるって

思っていたけれど

転機は突然訪れる

情報は

強風に吹き飛ばされるチリ

ネットの世界にあつという間に散っていく

簡単に削除できると思っていたものが消せない

消そうと思っても消えない

消しても 消しても きりが無い

取り返しのつかないことになってしまふ

デジタルタトゥー

たった一回

たった一回のクリックで

悪魔の扉は

突然 ひらく

いずれツバメかカキツバタ

東京都(元井之内) 山下 佳恵

のみこまれそうな広い海を 海面すれすれに飛んで

南の国から渡ってくるツバメ

巣をつくり 雛がうまれ 親鳥は

雨が降り 風が吹いても

餌をとり 運び 食べさせる

大切に 大切に育てた雛

あるツバメの親は

子を愛するあまり

巣立ちのときがきても

かわいい子になにかあつては大変 と

飛び方も教えずせつせと餌を運び続けた

色づいた葉がはらはらと散る

仲間がいなくなった空を

親鳥は餌を探し飛びまわる

自分から飛ぼうとする時期を逃してしまった子は

もう 飛ばない

巣立てないツバメ

愛情と過保護は背中あわせ

気がついたときは あとのまつり

はちきれそうな燕尾服

親より大きく育った子たちが

大きな口をあけ いつまでも餌をねだる

冬に南の国へ帰れなかったツバメは

カキツバタへと姿を変えた

カキツバタは燕子花

池のなかで咲きながら

もう飛びこすことのない

海をおもう

心して歩めよ

市原市(元富口)

村上 久江

ブザーも押さず
わが家の門をすり抜け
侵入してくるものには わたしよ
充分に気をつけろ

様子をうかがっているばかりで
明確な意志表示のないものには
さらに気をつけろ
それ以上踏み込ませてはならない
頼りにしてももちろんならない

わたしよ 怒りの炎を燃やせ
わたしの内には

右手に降魔の剣を持ち
左手に縄索をたずさえた

怒りと慈悲の不動明王がいるではないか
わたしの生涯を支え見守ってくれる

強く逞しいものが

わたしよ

わたしはわたしを信じなければならない
わたしを生き抜かなければならない
慈しみや愛を頼みとしてきたように
湧き出でた怒りの炎を信じたい

時のうねりは未曾有の混迷

狂い始めたものは 後へは引けぬ熱量で迫る
映像は乱れ 破壊され

途方もないどこかへ突き進もうとしている

わたしよ 心せよ

心して歩めよ

今日 わたしは

市原市(元富口)

村上 久江

独りうずくまる 夜の闇

闇におおわれた

がらんどうの静けさ

闘病十五年の男に

死が そこまで来ているという

手の届く そこまで

一点集中にともらせた思いは

いつまでも あわあわと

わたしのなかで息づく

哀しみの思いをまたひとつ携えて

わたしのおぼろ おぼろ

おぼろ おぼろを照らすのは

わたしの持ち得た生命の光

わたしは懸命であらうとする

一心であらうとする

そして

時はいつだって何かを要求する

ねばならないと

わたしを急かす

わたしの背を押す そして

立ち止まっただけは駄目だ

今この刻を突き抜けよと

わたしの意志を引き出す

時の世に己れを叱咤激励 切磋琢磨して

男は逝った 早や

四年余の月日が過ぎる

今日 わたしは一篇の詩をつづる

つづることのなかに わたしの

新たな光を探して

私の小さな旅

森 佐藤美保子

体と心のリフレッシュとりハビリを兼ね
月に一、二度バスに乗って外出に
不自由となった足は 杖が友で大丈夫
前日にイメージトレーニングする

停留所には十分前に着くこと
お金を包んだ紙は片手に持ち
杖はもう一方の手にしっかり持つ
バスが来た ドアが開く
降者なしの確認をする
杖が先に乗り お金の手はがっちりつかむ
投入口を確認して健常者並をチャラチャラ
出来た 近くの座席に座る
ホッと一息

今日のドライバーさんは優しいかな
たまに声の出ないドライバーさんもある

余計な詮索はしないこと
心に余裕ができると眼は窓外へ移る
しばしのタイムスリップに

アラツ次の次は降りなくては
背のリュック肩のバックと杖の確認

ときに停車位置は十メートル位おまけも
着いた 杖が外へ足はあとから
有り難うございました 自分に大丈夫を

自力で一步また一步 目的地へ懸命に
こんな小さな日常の変化は 喜びのひとつ
体の栄養と活力をつくる
生活の中でときに意識的に何かを課す私
頭に良い刺激は大事です 体にも大いに
もしもが今日かもなんて
つまらないことは考えない ひたすらに
生き 一回切りの一日を納得出来ればよい
基幹バスさん有り難う
私の小さな旅の終りです

春よこい

森 遠藤三千代

小さな庭の片隅に
ふきのとうが頭を出した
上を見上げると
白梅が早や満開か
暖かな日が多くあり
いつもより早く咲いた
花芽も多くとても美しい
多くの実がなるように
日の出が
米一粒ずつ早くなっているという
一月末もう何粒位
早くなったのだろうか
自然の移り変わりを追いかけながら
一日一日過ぎていく
春の訪れを待っているのは
私だけではない

多くの病を持っている人は
尚のこと春を待っている
春よこい 早くこい
みいちゃんの声が
聞こえてくるようだ
毎年 毎年
同じ繰り返しなのに
今年は少し違う
夫の病 早六年
少しでも良い方に向かうようにと
春に望みを託しながら
春よこい 早くこい

太陽

森 遠藤三千代

向かいの杉の木の天辺に

太陽が出た

カーテンを開けた

サッシの結露がキラ キラ キラ

小さな水の結晶

太陽があたってキラ キラ キラ

寒いというより

これが現実

強烈の寒波

太陽が出た キラ キラ キラ

冬の太陽は

有りがたい

一年中同じ太陽なのに

春のはじめの太陽

夏のはじめの太陽

真夏の酷暑の太陽そして秋

さまざまに姿を変えて

太陽は顔を出す

私達にはちょうど良い太陽がいる

我がままと言われても

無くても困る

有り過ぎても困る

エアコン無く過ごす事が

できる夏もあった

たらいに水をはり

太陽に温めてもらい

行水をした日

浴衣に着替え

ほたる狩りをした日

あの頃の太陽は

日が沈めば現在のような暑さは無かった

もはや人間の対処できるわざではない

明日はどんな太陽が出るのだろうか

空おぼれ

埴谷 大掛 史子

源氏物語という絢爛たる織物の中に
恋の名歌を数知れず織り込んだ紫式部の
実生活での恋歌は限られている

平安京の風俗方違えが惹き起こした場面

紫式部の父藤原為時邸に方違えにやって来た男

その客に部屋を取られたからか同室に寝ていた姫たち
うら若き式部とその姉である

方違えにわたりたる人の、なまおぼおぼしきことありて、

帰りにける翌朝^{つとめで}、朝顔の花をやるとて

おぼつかなそれかあらぬか明けぐれの

空おぼれする朝顔の花

返し、

手を見分かぬにやありけん

いづれぞと色分くほどに朝顔の

あるかなきかになるぞわびしき

方違えの客の何とも妙な怪しい振舞

まさか二人いると思わず忍び込んだ男の帰った翌朝

朝顔の花に添えて

どうもはつきりしないのですが

暁方私共の部屋から出て行かれた方

薄ら明りに空とぼけて咲いている朝顔の花を見たような

なまおぼおぼしきことをしでかしながら

事遂げずに空とぼけて帰っていったこの男こそ

後に式部の夫となる藤原宣孝

宣孝の曾祖父は右大臣定方

式部の父為時は定方の女を母とする姻戚関係

式部は二十も年長の宣孝をよく知り

彼が図々しく言い寄っているのも

娘を思う父為時の心配りでもあったろうか

忍び込んだものの二人いた娘たちにたじろいで

空おぼれの顔で退出した男への娘たちの挑発

苦笑いしながら男は返す

お二方の姫のどちらの筆跡かと思迷っておりますうち
ぽんやりと拝見した朝顔の面影も次第に薄れ

お会いしたようなしないような

そんな記憶になつてしまふのが残念です

こんどはお一方とだけゆつくりとお会いしたいものと含めて

豪放磊落な能吏で

既に幾人かの妻と子を持つ宣孝と

才気を内に秘めた文学少女との結婚は結構うまくいき

一女賢子(大式三位)を成したもののわずか二年で死別

源氏物語の書きそめは

娘の誕生や夫の病没と同時期らしい

数年後父為時が右大臣道長から式部の出仕を懇望され

中宮彰子に仕えつつ筆の進みは乘りに乘り

名立たる教養人左衛門督公任から

「若紫やさぶらふ」と戯れられるほどになつていく

壮麗な物語の存外な一隅に覗く空おぼれの眼ざし

作家紫式部のしたたかな物書き魂を滲ませて

寅さんは俳人だつた

壇谷 大掛 史子

「男はつらいよ」の寅さん

人気絶頂で帰らぬ旅に出たままの彼を

待ちつづけたある日出会った一句

お遍路が一行に行く虹の中

風天

寅さんを演じ続けて突然

あの世に迎えとられた渥美清の辞世の句だ

唐突にやってきて

名優渥美清は俳人風天だったと知らしめる句

句会では物静かで無口、几帳面に会計をやり

片隅でひっそり句作に没頭していたとか

山田監督が想を練っていた

「寅次郎花へんろ」

遙かなスクリーンの中に寅さんがいる

お遍路の列と残された時間をじっと見つめて